実践事例で見る
学びのnext
第3回

生徒と教職員が全員で、端末を文房具のように使う状態を目指し、効果的な学習ソフトの活用を推進

石川県 能美市立辰口中学校

石川県能美市立辰口中学校は、2021年度から、「1人の100歩ではなく、100人の1歩」をキーワードとして、すべての学年・教科でICTを活用し、「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業づくりを進めている。教員は、ICT支援員の助言を受けながら、活動のねらいに応じてICTの使い方を工夫。さらに、校内の様々な仕組みを見直してDX*1化し、効率性や利便性を高めたところ、生徒からICT活用のアイデアが提案されるなど、学びへの姿勢が変容してきている。

市のスピーディなICT環境整備と県のモデル校指定でICT活用が浸透

能美市は、2020年11月、市内の小・中学校の全児童生徒と全教職員に1人1台の端末を貸与し、校内の無線LANも完備して、本格的にICT活用をスタートさせた。2021年度には、中学校の全教室にプロジェクター型電子黒板とスクリーンを、小学4～6年生の全教室に電子黒板を整備。2022年度現在、市内の小・中学校の全教室に電子黒板を完備させた。

その恵まれたICT環境の下、能美市立辰口中学校は、2021年度より2年間、石川県教育委員会「**GIGAスクール構想の実現に向けた教員のICT活用指導力強化事業**」のモデル校の指定を受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、全校を挙げてさらなるICT活用を推進している。キーワードは、「1人の100歩ではなく、100人の1歩」と、全生徒と全教職員が「1人1台の端末を文房具のように使う」だ。研究主任と連携して、端末をより効果的に活用した授業づくりを進めるGIGA校内推進リーダーの仁地裕介先生は、こう説明する。

「本校のGIGAスクール構想は、『全教職員で推進していく』という校長の方針の下、研究主任とともに先生方に対して、『全員で取り組みましょう』と繰り返し声をかけ、教科部会ごとに話し合って、ICT活用のアイデアを形にしていきました。初めは端末の操作に不慣れな教員もいましたが、試行錯誤をしながらも授業で使ううちに、『生徒が授業に集中しやすくなった』『理解度が高まっている』などと、ICT活用のよさを実感するようになりました。そのようにして、教員も生徒も授業で端末を使うことに慣れていきました」

2022年度は、研究主題を**「つながり合い、向上する生徒を目指して」**と設定し、協働的な学びに重点を置いた研究を続けている。

「自分1人では解決できない問題でも、仲間と助け合いながら取り組む学びを大切にしています。協働的な学びの効果を高めるため、協働学習ソフトを始めとして、ICTの効果的な活用法を追究しています」（仁地先生）

音楽鑑賞の授業でICTを活用し、曲想の変化を深く味わう

ICTを活用した授業づくりでは、ICT支援員が大きな役割を果たしている。以前は、端末の不具合への対応や校内アンケートの集計など、校務に関する支援を依頼・相談していたが、モデル校となったのを機に、

学校概要

開校 1947（昭和22）年
校長 谷鋪景子先生
生徒数 465人
学級数 15学級（うち特別支援学級2）
教員数 43人

ICT環境
学習者用端末 タブレット型パソコン
通信環境 無線LAN
通信速度 約350Mbps
その他のICT機器 電子黒板
ICT担当教員 5人
ICT校内研修 年4回（別途、個人研修あり）
ICT支援 月4回

主幹教諭、GIGA校内推進リーダー
仁地裕介
にんち・ゆうすけ
同校に赴任して2年目。
教務、保健体育科。

音楽科
安村ちひろ
やすむら・ちひろ
同校に赴任して6年目。
保健文化部、3学年担任。

＊1 Digital Transformation（デジタルトランスフォーメーション）の略語。2004年にスウェーデンのウメオ大学のエリック・ストルターマン教授が、「ITの浸透によって、人々の生活をあらゆる面でよりよい方向に変化させること」として提唱した概念。

授業支援も依頼・相談するようになった。今では、端末を効果的に活用した授業のアイデアを提案したり、授業に必要な資料を作成したりと、ICT支援員が教員の授業づくりを様々な面から支えている。

月４回のＩＣＴ支援員の来校日には、相談したい教員が10分単位で事前予約する形のスケジュールを作成。教員とＩＣＴ支援員が、時間の無駄をなくしてスムーズに連携できるようにしている。

音楽科の安村ちひろ先生は、元々ＩＣＴ機器の操作は得意ではなかったが、ＩＣＴ支援員の助言・支援を受けながら授業づくりを行っている。１年生の『魔王』を鑑賞する題材では、端末を活用して、生徒の気づきを促し、より深く鑑賞できる授業を展開した（**授業リポート1～6参照**）。

「授業構成は、以前と大きくは変わりませんが、ＩＣＴを活用することで、すべての生徒が曲を深く味わっていて、それが学び合いの深まりにつな

授業リポート

1年生　音楽科「『魔王』の鑑賞」（全3時間）

曲想と音楽の特徴とのかかわりを探ろう

1 『魔王』の曲を鑑賞

1時間目の前半

『魔王』は、１人の歌い手が４役（語り手、子、父親、魔王）を歌い分けるドイツ語の歌曲だ。生徒は、それらの予備知識がない状態で、ドイツ語の原曲を７つの場面に分けて鑑賞。演奏形態から登場人物を想像し、曲の全体像を捉えた。

2 絵と歌詞のカードの並び替え

1時間目の中盤

【個人ワーク】オクリンク＊2の画面に、７つの場面の解説がある絵のカードと、歌詞（日本語訳）カードを、バラバラに配置。生徒は、絵に対応する歌詞カードを選んだ後、曲の物語を想像して、絵と歌詞の組み合わせを考えた順序に並べ替えた。

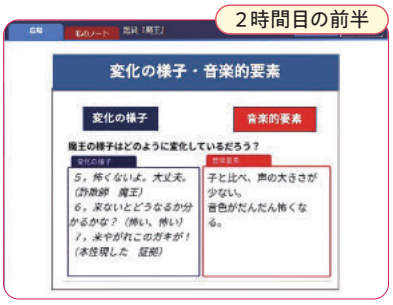
3 物語の正しい順序を確認

1時間目の後半

【グループ・個人ワーク】各自が考えた物語の順序をグループで共有した後、安村先生は、黒板に同じ絵のカードを示しながら、正しい順序と物語を説明。続いて、「子」が語る場面のみを抜き出して鑑賞し、「子」の心情の変化を曲想から考えた。

4 曲想の変化を分析

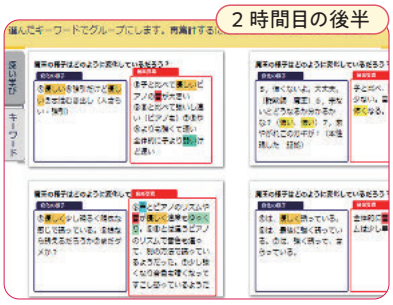
2時間目の前半



【個人ワーク】「魔王」が語る場面を抜き出して鑑賞し、パートによる曲想の変化などを捉えた。次に「子」と「魔王」の変化を対比して、感じたことや気づいたことを紙のワークシート（**P.30 図**）に書いた後、それをムーブノート＊3に入力した。

5 分析した結果を共有

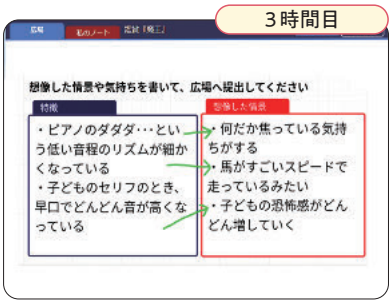
2時間目の後半



【グループワーク】ムーブノートで、それぞれの感じたことや気づきを共有した。安村先生は、生徒の入力から頻度の高いキーワードを集計し、生徒の思考の傾向を把握。それを基に「こう感じている人もいるよ」などと生徒に声をかけて、気づきを促した。

6 『魔王』の紹介文を書く

3時間目



【個人・グループワーク】『魔王』を鑑賞してイメージした情景や、登場人物の心情などを踏まえ、各自が『魔王』の紹介文を作成。それをムーブノートに入力し、全体で共有した。最後に、『魔王』を日本語訳の歌詞で聴き、感想を語り合った。

＊2　モニタリング機能や、画面共有機能などで授業を支援するベネッセの「ミライシード」のアプリケーション。

＊3　意見共有や、集計機能などで協働学習を支援するベネッセの「ミライシード」のアプリケーション。

がっています」（安村先生）

同題材は、音の強弱や高低、曲の旋律などの変化を聴き取り、音楽表現の奥深さを理解することをねらいとした、全３時間の授業だ。

以前は、『魔王』の物語をイメージできるようにするために、生徒が寸劇を行う活動を取り入れていた。しかし、一部の生徒に関心を持てない様子が見られたので、授業支援ソフトを使い、物語の流れに沿って歌詞カードと絵のカードを並べ替える活動に変えた。すると、どの生徒も、楽しみながら物語を想像し、音楽を鑑賞する姿が見られるようになり、その後の意見交流も活発になった。

さらに、登場人物の「子」や「魔王」の心情の変化を分析して意見交換をしたり、一人ひとりが曲の紹介文を書いて共有したりする活動では、協働学習ソフトで生徒の入力内容を一覧化。より多くの生徒の考えに触れられるようにすることで、同じ音楽を聴いても、感じ方は一人ひとり異なることに気づけるようにした。

音楽を聴く力が高まり、音楽的な見方・考え方を獲得

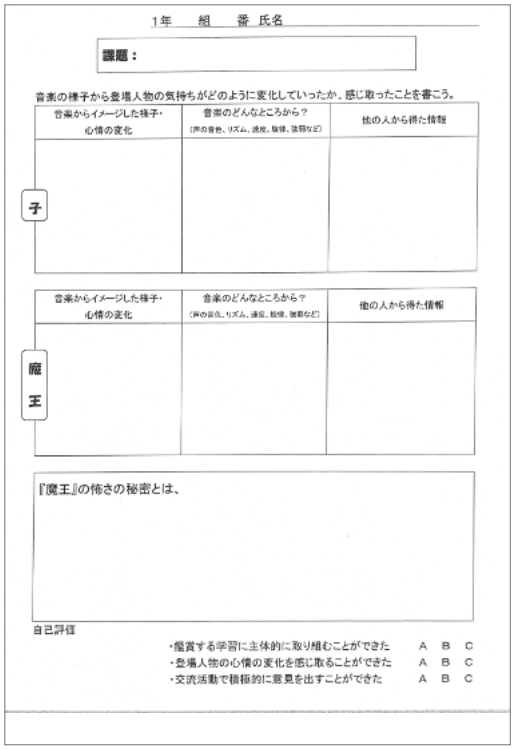
安村先生は、他の題材でもＩＣＴを積極的に活用している。例えば、ヴィヴァルディ『四季』の鑑賞では、曲を通して感じた季節の移ろいについて、協働学習ソフトに感想を入力して共有する活動を行っている。

箏（こと）の演奏では、曲の一部を各自が創作し、それを演奏する様子を動画で撮影し、オンラインで提出する。安村先生は、その動画を見て、アドバイスなどをし、次の時間に生徒が修正するといった活動だ。

そうした授業を通して、生徒は音楽的な見方・考え方を獲得していくという。

「音楽は、感覚的な要素が強く、感じたことを言葉で表現するのがなかなか難しいのですが、生徒にはそうした力が育ちつつあると感じています。ある生徒が、『以前は何気なく音楽を聴いていたけれど、それぞれの曲のどこが好きかなどをよく考えて聴くようになりました』と話してくれた時には、音楽的な見方・考え方が身についてきていることを感じて、うれしくなりました」（安村先生）

図　２時間目に使用したワークシート


1年　組　番　氏名

課題：

音楽の様子から登場人物の気持ちがどのように変化していったか、感じ取ったことを書こう。

	音楽からイメージした様子・心情の変化	音楽のどんなところから？（声の音色、リズム、速度、強弱、強弱など）	他の人から得た情報
子			
魔王			

『魔王』の怖さの秘密とは、

自己評価

・鑑賞する学習に主体的に取り組むことができた　A　B　C
・登場人物の心情の変化を感じ取ることができた　A　B　C
・交流活動で積極的に意見を出すことができた　A　B　C

登場人物の心情の変化を、曲想の変化から捉え、紙のワークシートに記入してから、ムーブノートに入力するようにした。
※辰口中学校の提供資料をそのまま掲載。

学校生活全体を見直して、校内のDX化を積極的に推進

同校では、**校内のＤＸ化**も推進している。その一例が、学校の公式サイトとは別に設けた、教員と生徒のみが閲覧できるウェブサイトの活用だ。学年ごとに授業内容の週間予定や、部活動の練習予定などを掲載し、生徒が確認できるようにしている。

同校では、ＩＣＴ活用が進んだことで生徒の学習サイクルが見直され、端末を家庭に持ち帰って授業の復習などを行い、学校での学習を家庭学習につなげることを、生徒に推奨している。それに伴い、教科書を持ち帰るかどうかは、生徒個々の判断に委ねることにして、毎日、係の生徒が各教科の教員に授業予定を聞き、所定の黒板に記入する作業を行っていた。それをウェブサイトに掲載する方法にして、作業の効率化を図ったのだ。

同ウェブサイトでは、学校をよりよくするＩＣＴ活用のアイデアを生徒から募っており、授業内容の週間予定の掲載は、生徒のアイデアを基に実現したものだ。

また、学級ごとのコーナーもあり、学校行事の写真を共有したり、担任がその時の思いを書き込んだりと、学級運営に役立てている。他にも、オンラインツールを活用して全校集会や委員会活動を効率よく行ったり、生徒会選挙をオンライン投票にしたりと、様々なDX化が進行中だ。

「ＩＣＴ活用が浸透する中で、新たな可能性や楽しさを少しずつ見いだせるようになり、教員や生徒の様々なアイデアが具体的な形となって実現しています。これからもＩＣＴをうまく取り入れて、授業を含めた学校生活全体をいかに改善していくかを考え続けていきます」（仁地先生）